

中国国境地域の移動と交流：近現代中国の南と北

| | |
|-----|---|
| 著者 | 塚田 誠之 |
| 発行年 | 2010-03-30 |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4800 |

序文 中国国境地域の移動と交流をめぐって

塚田誠之

1

中国は陸上で十四カ国と国境を接している。国境地域には多様な民族集団が居住しているが、多くの場合、国境線をはさんで中国および中国と隣接する諸国に同一あるいは同系の民族が居住している。南部について、一九九〇年代以降、大メコン圏（GMS）開発プロジェクトの進行やアセアン自由貿易圏の実現へ向けて、中国と東南アジア大陸部諸国との国境を越えた経済的關係が強まっている。一方、北部と北西部の遊牧民集団とムスリム集団はチベット仏教あるいはイスラームを信仰し、国境を挟んで中央ユーラシア世界と歴史的に強固に結ばれてきた。近年では、国際鉄道網・道路網の整備が進み、中国と中央アジア諸国との経済協力体制が緊密化している。こうした情勢下において、人々の国境を越える移動が頻繁に見られるようになってきている。

従来、中国の南北国境地域の諸民族の人口移動について、特定の地域を越えた研究はほとんど行われてこなかっ

た。その数少ない試みとして『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』[塚田誠之編 二二〇〇三]では、中国の周縁地域における諸民族の移動と最新の文化の動態を扱った。論点としては、方向や契機など移動・移住のあり方、移民と受け入れ側との関係、移動を通して見えてくる国家政策、移民と受け入れ側の人々の文化の動態など、人の移動に関わる重要な問題点が検討の俎上に上された。移動と文化の形成との直接的な相関関係あるいは因果関係を明示することには限界があったが、移動・移住現象の研究の蓄積に寄与した。また『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』[塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編 二二〇〇一]では、中国南部の諸民族の移住について、移住のプロセスにおける国家政策との関わり、移住にともない発生した民族間関係、新たな民族集団の形成やアイデンティティの揺らぎなど、移住現象についてポイントを押さえて検討した。南部が中心ではあるが、中国諸民族の移動・移住研究への貢献は小さくない。それらの中には国境地域を舞台に検討した論稿も個別的には見られたが、中国南北の国境地域の移動・移住現象の比較という点では必ずしも十分ではなかった。

当事者の中国や隣接諸国での研究は、それぞれの所属する国家の利害がからみ、主観的になりがちであった。たとえば、国境に跨って居住する民族は中国では「跨境民族」「跨国民族」などと呼ばれるが、研究は中央の側からの政治的な色彩を帯びがちである。中国側の研究では、自国の民族を基準とし、しかも他国の民族に関する情報は、二次資料、すなわち各国で出されている関係論文の中国語訳が使用され、それも概説的な資料が多く、独自の視点からの分析がなされてこなかった。また政府主導の経済開発や技術支援など政治・経済的な側面が強調されがちであった。

本研究は、平成十七年度から二一年度まで行われた人間文化研究機構連携研究「ユーラシアと日本…交流と表象」のうちの「中国南北の国境地域における人の移動と交流、および国家政策」班（代表者…塚田誠之）の研究成果である。その目的は、中国の南北の国境地域における人の移動と交流の実態を把握し、国家政策の果たす作用を説明せんとするものである。

具体的な検討課題として次の点が挙げられる。一、中国では人の移動は歴史上絶え間なく行われ、民族やその文化は移動や移動先での他者との交流を通して形成されてきた。移動することで人々は移動先の地で異なる民族集団を含む他者と接触し交流することになる。移動はどのように行われたのか。また交流には通婚、経済、文化、宗教的活動など多様な側面がある。それらの実態はどうであるのか。さらに、集団間相互の関係はどうであるのか。二、移動することによって、その民族の文化や宗教、アイデンティティにどのような影響を及ぼしているのか。三、移動は個人の意思を契機とするのみならず国家の政策を契機としても行われた。国家の政策は移動と交流にどのような作用を果してきたのだろうか。

検討に当たっては、中国南北の相違や山地民と平地民の相違に留意する必要がある。また対象とする時期は、国民国家の勃興期に国境が画定され人々の生活空間を分断した時期、十九世紀末から民国期を経て現在に至るまでを中心とする。人の移動の歴史的背景を押さえておく必要がある。方法には民族学を中心とするが、歴史学的方法をも視野に入れつつ、また村落・村落群のミクロ・レベルと広い地域や民族・国家といったマクロ・レベルの双方を視野に入れて比較研究を進める。

2

次に本書の内容について概観しよう。

第一部では、移動のあり方、移動と交流・民族間関係を扱う。何を目的に移動するのか、そして移動することで、人々は移動先の地で異なる民族を含む他者と接触し交流することになるが、どのような相互関係や交流が見られるのか、ここではそれらの点について検討する。

陳論文は、華人の移動のあり方と目的について、出身地域や世代の違いに留意し、王麋武の四類型を援用しつつ具体例にもとづいて検討している。まず、移動のあり方として、アジア間の移動、北米からアジアへの移動、アジアから北米への移動が挙げられる（それらのうちアジアから北米への移動が比較的多い）。目的は移動先地域や世代によつて異なるが、たとえばアジアから北米へ移動する場合、戦前は仕事をを得るため、戦後は政治的不安から安定的な生活を得て市民権を取得したり、医療福祉、留学などのためである。次いで、アジア間の移動をした親の元に生まれた次世代はアジアから北米へ移動する傾向があり、アジアから北米へ移動した親の元に生まれた次世代は北米からアジアへの移動傾向があるなど、世代によつて移動のあり方が異なる。こうした傾向の背景に、華人は世代に関わらず頻繁に移住しているが、家族が国境を越えて分散することには抵抗が低いことが挙げられる。さらに移動の目的のなかでも、欧米に移動する場合は市民権や教育のため、アジアに移動するのはビジネスや仕事のためと違いが見られる。くわえて国籍とアイデンティティについて、一般的に両者は別物と考えられているが、移動先国の法制度や移民政策の違いによつては事情が異なり、アジア（日韓）に移動したものは両者を同一のものとしてとらえる傾向があるという。移動の目的、すなわち移動することによつて移民が何を手に入れようとして来て、現在どのような傾向にあるのかを世代別に明確に示されている。

長谷川論文は、雲南省西部徳宏地域のタイ族について、雲南・ビルマルートの建設とそれともなう交易活動、宗教（仏教）活動、漢族移民の流入、在地の土司の道路建設への関与などの動きを検討している。雲南・ビルマルートは、十九世紀末の騰越・バモールルートや一九三〇年代以降の国際輸送路「滇緬公路」であるが、この道を通つて牛の隊商などによつて様々な物資がもたらされ商業が活性化し、また巡礼、仏像の購入など宗教（仏教）の広域ネットワークの成立するルートともなった。人の移動や文化の伝播に交通路が果たした役割は重要である。このルートの建設に際して、要衝に位置する徳宏の土司がその統治組織を利用して取り組んだ。土司はタイ族、漢族、非タイ族からなる

複合社会であるが、漢族の農民や季節商人が漢族式の家屋や姓・年中行事・教育などをタイ族にもたらした。かくして文化的アイデンティティやエスニシティの表出において、漢族の影響を受けた雲南側タイ族とビルマのシャン人とで相違が生じたことが示されている。

塚田論文は、広西の壮族とベトナムへ移住したヌン族との社会文化の異同、両者の間の交易、親戚・友人の往来、同年関係によるネットワーク、通婚、ベトナムからの季節的な出稼ぎなどの動きを検討している。双方のイメージについても検討し、自民族を基準として相手と同じ言語を話す人として認識していることから、民族名よりも実際使用されている言語が重視されていること、同じ言語を話す「講土」意識に基づくアイデンティティの形成が示唆されている。またヌン族のもとで、ベトナムへ移住した後にキン族の影響を受けて漢字・漢語能力をもつものが減少しているが、漢字保持はアイデンティティの拠り所になること、さらに国境に住む人々が政治的な国境線を意識しながらもそれを相対化している現状が示され、人々の立場から国境の持つ意味を問い直すことの必要性が示されている。

武内論文は、十八〜十九世紀の雲南南部の主要な交易品である茶と綿花に焦点を当てて、その生産と流通を担った山地民・漢族移民の動向を検討している。ハニ族やブーラン族などの山地民が茶葉を栽培し、タイ系土司が管理する茶山で採取される普洱茶について、清朝が交易を管理し漢人客商による直接買い付けを禁止した。しかし、その制度は漢族移住民による茶園の掌握によって形骸化し、民族対立が勃発することになる。また綿花については雲南西部でチンポー族などの山地民が栽培に従事したが、商品経済が浸透することで、山地民・平地民関係に変化が生じた。このように十八〜十九世紀に山地民社会に漢族の移民・商人とともに商業化の波が及び、以前のような山地・平地間の共存関係や山地民の社会が変容していった。とかく平地民との違い、独自性が強調されがちな山地民の社会が、実は移民と商業化を通して、相互に深く結びつきながら歴史を紡いでいったことが示されている。

赤坂論文は、東イラン系騎馬遊牧民アス（アラン）人の移動の経緯と移動先での歴史を検討している。北カフカス

地域に居住していたアス人は、十三世紀、モンゴルの軍事行動の結果、カフカスに留まった者、モンゴルに仕え元朝の北遷後はアズドとしてモンゴル高原に居住する者に分かれた。さらに、遠くハンガリーに移住したヤース人もその一部とされる。ハンガリーに移住した者は言語が現地化し、モンゴルに移住した者も移住の歴史的記憶は失われた。前近代の事例ではあるが、もとは同一の集団が、ユーラシアの東西へ遠距離移住をし、移住先で現地社会の影響を受けて文化変容を遂げ異なる集団になっていった経緯が示されている。

文化変容については、先の長谷川論文で、雲南側のタイ族が漢族の文化的影響を受け、また塚田論文ではヌン族がキン族の影響を受けたことが指摘されている。では移動にともない文化やアイデンティティはどのような動きが見られたのだろうか。

第二部では、移動と文化変容・アイデンティティの変容を扱う。移動することによって文化のどの側面にどのような変容が見られたのか、また文化の変容とともに移動が人々の新たなアイデンティティ形成を促した点について検討する。

木村論文は、中国雲南からミャンマー・タイ経由で台湾に移住してきた中国系ムスリムについて、そのコミュニティ内部での社会関係が変化し、外部社会との関係性が新たに構築されていくなかで、宗教実践がどのように変容しているのか検討している。社会関係の相違に応じて三つの社会構造に分類して、断食明けの「挨拶回り」による移住の経験の共有を通じたコミュニティの再構築・維持、雲南ムスリムのモスク教長への招へいによる国境を越えたネットワークの保持、ミャンマー・タイで行われていた祭礼が台湾への移住後に現地の漢人社会との相互作用のなかで行われなくなったことを挙げて、それぞれの意味を考察している。

松本論文は、雲南ムスリム知識人が、伝統社会から近代社会への転換という激動期に、自らの宗教、アイデンティ

ティをどう認識し、どう再構築してエスニシテイの生存を図ろうとしたのか、ムスリムの国境を越えた移動と情報獲得の及ぼした作用に関わらせながら、ムスリム雑誌の刊行を通じて検討している。十九世紀後半にマッカ巡礼から伝統的な「存在一性論」を持ち帰ったが、回民蜂起を経て、十九世紀末から二十世紀にかけて、キリスト教の伝播、科学技術、帝国主義・国民国家、新式教育など「近代」が押し寄せるなかで、中東・日本を訪れた宗教指導者・知識人たちが新たなイスラーム文化・宗教教義を利用し新たなアイデンティティ形成に着手し、エスニシテイとしての「回族」認定運動を進めたことが示されている。そうした動きは「中国社会で周縁という劣位に置かれた」ムスリム知識人が「被圧迫・被抑圧を止揚し、少数者として生き延びるための模索」であるという。

吉野論文は、中国からタイへ焼畑耕作を行いながら移住したユーミエン（中国ではヤオ族）について、社会組織、儀礼、エスニシテイ、物質文化の諸般に及び変容が生じたことを、タイ・中国の場合を比較しながら検討している。社会組織についてはタイのユーミエンの場合、父系的傾向が強いが、中国の場合、婿養子やキョウダイで姓を分ける「両頭頂」であること、儀礼「度戒」については儀礼の種類・細目・儀礼名のほか、タイでは同姓父系親族、中国では同じ村の者という参加資格者に相違が見られること、自らのエスニシテイの表出に関して、タイでは漢字だが、中国では道教宗派が他集団に対する示差的文化要素となること、家屋の様式の違いなどが示されている。中国の場合、物質文化には多数派民族の漢族の影響が見られるが、社会組織上はそれは必ずしも強くなく、かえってタイのほうに「古式な」原理が保持されるが、それは多数派民族の影響というよりは彼ら自身が共通するルールを持ちながら運用が異なった結果であることが示されている。

移動は個人の意思を契機とするのみならず国家の政策によっても行われた。木村論文では雲南ムスリムの台湾への移住は、もとは中国共産党政権成立後の国際関係に起因している。

長谷川論文では移動や交流の大動脈「滇緬公路」の建設それ自身が国家政策によって行われている。移動は多かれ少なかれ国家政策と関わりを持っている。第三部では、移動と国家政策について扱う。

片岡論文は、ラフ族の移住について、全体の移住の潮流と個別村落の事例の二方面から国家政策・国際情勢との関わりにおいて検討している。山地民は国家の観念を持たず、常に国家の外に存在していた、とか、焼畑により一次林開拓を繰り返した結果いつの間にか国家を跨いで移住したといったステレオタイプ的な見解を批判し、むしろ国家との関わりゆえに移住を強いられたことを実証する。マクロなレベルでは、ラフ族は、十九世紀初に漢人地主と清朝に追われて東南アジア側に移住を開始し、同世紀末には、ビルマの英領化にもなつて直接統治をめざす清朝支配に抵抗して移住する。同時期にキリスト教へ改宗した。そして民養村の個別事例の検討からは、第二次大戦期から宣教師に率いられて英米軍・蒋介石を支援し、一九四九年の中華人民共和国成立を機に国民党軍に随つて移住し、反共蜂起に加わつたが、敗れてビルマへ、のちタイへ移住した。このような国際情勢の変化によつて、現代冷戦史の最前線に担わされ移住を強いられてきた動きが示されている。

谷口論文は、移動というより、国家の民族政策自体の方向性に焦点を当てている。中国の少数民族「ミャオ族」の内には文化的多様性をもつ下位集団が顕著であるが、言語や文化的側面から下位集団の行動や言説を検討している。民族幹部やその民族の知識人たちは「上から」、「民族」としての「ミャオ族」への方向性を志向するが、民衆は下位集団や地域社会への志向性をもつ。前者は、文字創製と言語使用における漢字漢語優先の傾向や様々な「民族的祭典」の創出の際の動きに示される。人の移動と交流という課題に即して言えば、彼らの楽器・蘆笙は、本来購買圏が狭かったが、一九九〇年代にアメリカ在住の同族である「モン」族が訪れ、販売し、今日では海外にも知られるようになったこと、また文山チワン族ミャオ族自治州で行われた民族的祭典の「花山節」にラオス出身のフランスのモンが親族探しに参加するなど海外の同族との交流の事例が示されている。政治的に「創造」された中国の「民族」に

は内部に下位集団を持つ場合が多く、ミャオ族はその一つの事例であるが、そうした下位集団と移動との相関関係も今後注目される。

岡論文は、十六世紀初から十八世紀中葉にかけての清朝のモンゴル統治の複合的・重層的な構造について、軍事組織である盟旗から、歴代皇帝によつて保護され専属の属民を有したチベット仏教寺院広覚寺へ寄進・売却された属民をめぐる争いとその処理に焦点を当てて検討している。この場合、空間的な人の移動というよりは属民の身分的な移転という社会階層の移動である。検討を通じて盟旗制度とともに、それと矛盾するチンギス・ハーンやダヤン・ハーン以来のモンゴル王侯の封建的な主従関係（エジエン・ハリヤアト）が別個に併存するという清朝のモンゴル統治体制における二面性が示されている。

楊論文は、内モンゴルのモンゴル族たちが現代史においてたどってきた運命について、内モンゴルからモンゴルへの越境者のライフ・ヒストリーをまじえながら検討している。ヤルタ協定による内外モンゴルの合併阻止という国際情勢、文化大革命の際の弾圧などの中国の国内事情、さらに現在の内モンゴルの国境防衛の強化などの統合政策によつて「心の自由」を尊ぶモンゴル族は分断され続けてきた。とかく政治的な統合を志向しがちな国民国家による少数民族統治の問題点の一環が、「振り子」のように翻弄される弱小民族の立場から浮き彫りにされている。

3

以上により、中国南北の国境地域における人の移動と交流のありよう、国家政策との関わりが明らかであるが、ここで諸論文を通観して移動に関する南北の違い、山地民と平地民の違いを一瞥しよう。

北部においては、楊論文に見られるように、人の移動は政治の掣肘を受けがちであった。モンゴル族の土地に人為

的国境線が引かれて、内モンゴルが中国に組み入れられ「血肉を分かちあつた民族」が分断されて移動が制限されてきた。現在も国境の人の往来は制約されている。他方、南部の場合はより開放的である。中越国境は、広西からベトナムへ南下移住したヌン族が、同系の壮族と交易や文化活動など日常的に越境して往来してきた（塚田論文）。中緬国境は、タイ系の人々は複数の国民国家に所属しそれぞれの国家システムから影響を受けることになったが、ビルマから中国へ開かれた交通路にそつて交易が行われ、仏教の広域ネットワークが形成されるなど国境を越えて経済文化面の交流が行われてきた（長谷川論文）。国民国家によつて統合政策がとられ、国境線が引かれて人々の生活圏が分断されたことは南北に共通している。また中国から東南アジア大陸部にかけて居住するユーミエン、モンなどの山地民の一部がラオス内戦によつて難民として海外に逃れるなど政治の影響も受けた。しかし、北方では米ソ冷戦、中口関係の国際情勢の影響を長期間受けてより厳しい統合になりがちで、人々が国境を相対化することが可能な環境になりにくかつたことが指摘されよう。

この外に、北部における（生業・生活様式に起因するであろう）民族の流動性の相対的な高さ（赤坂論文）、さらには中央との歴史的な関係の濃淡の相異（岡論文）が指摘されよう。

山地民の場合、平地から波及した商業化や漢族移民の影響を受けて社会が変容し（武内論文）、平地民族の圧迫や国家の政策が山地民の移動の引き金になる（片岡論文）など、山地民と平地民とは相互に深く結び付いていた。また、文化的にもそれぞれの国家の多数派民族の影響を受けてきた（吉野論文）。しかし他方で、ユーミエンの例のように漢族文化を受容しつつも、その漢族文化を運用して自らのアイデンティティを保持するような戦略をとつてきた（吉野論文）。山地民も平地民同様に国民国家の統治下に置かれ、ときに冷戦の最前線を担わされたが、そうした環境において彼ら自身の選択した文化的適応様式の平地民との違いが指摘されよう。

本書の多くの論文では、人々は国境を越えて移動してきたし、移動は現在も進行中であることが示されている。

人々の日常生活の維持に関するさまざまな実践、経済活動や文化の伝播、さらには多様なネットワークは国境を越えて展開されてきた。人々の日常の営為は国境を相対化する傾向がある。タイ系の人々は国境を越えて汎タイ意識を共有している（長谷川論文）し、壮族・ヌン族は国境を越えて同じ言語を話すという意識を持つている（塚田論文）。さらにモンゴル人の間での国境を越えた同胞意識が顕著である（楊論文）など、人々のアイデンティティは国境を越えて形成されている。アイデンティティのありようには南北で環境や歴史的な経緯等に起因する相異があるが、いずれにしても国境を越えて形成されているのである。人々は国境の果たす作用についてどのように認識しているのだろうか。現在の華人の場合は家族の分散を含めて越境移動に抵抗がない（陳論文）というが、諸民族の国境認識はどのようなものであるのか、国際的なウェブサイトで異なる国家に分かれた同族の動向を知ることができる（吉野論文）現在、動向がますます注視される場所である。国境のもつ意味について人々の目線から見直すことが不可欠である。国境をめぐるさらなる文化的な研究が求められている。

注

中国における人の移住の研究として、中国国内における漢族の移住方式を扱った西澤治彦の研究は重要である〔西澤一九九二〕。なお、中国人の移動に関する諸論文の目録が付せられている。

参考文献

- 塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編 二〇〇一『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』平凡社
塚田誠之編 二〇〇三『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』風響社
西澤治彦 一九九二「村を出る人・残る人、村に戻る人・戻らぬ人——漢族の移動に関する諸問題——」（可児弘明編『シンポジウム 華南——華僑・華人の故郷』慶應義塾大学地域研究センター）